京に入ること漸く近づき、悲情撥ひ難くして、懐を述ぶる一首　并せて一絶

四〇〇六番

かき数ふ　二上山に　神さびて　立てるつがの木　本も枝も　同じ常磐に　はしきよし　我が背の君を　朝去らず　逢ひて言問ひ　夕されば　手携はりて　射水川　清き河内に　出で立ちて　我が立ち見れば　あゆの風　いたくし吹けば　湊には　白波高み　妻呼ぶと　渚鳥は騒く　葦刈ると　海人の小舟は　入江漕ぐ　梶の音高し　そこをしも　あやにともしみ　しのひつつ　遊ぶ盛りを　天皇の食す国なれば　命持ち　立ち別れなば　後れたる　君はあれども　玉桙の　道行く我は　白雲の　たなびく山を岩根踏み　越え隔りなば　恋しけく　日の長けむそ　そこ思へば　心し痛し　ほととぎす　声にあへ貫く　玉にもが　手に巻き持ちて　朝夕に　見つつ行かむを　置きて行かば惜し

四〇〇七番

我が背子は　玉にもがもな　ほととぎす　声にあへ貫き手に巻きて行かむ